

「資質・能力の育成に向けた授業づくり①—知識及び技能の指導と評価を軸に②—」

# 資質・能力の育成に 向けた授業づくりの 現状と今後の展望

**熊谷（司会）** 学習指導要領の全面实施から四年目を迎えました。今回の座談会は、資質・能力の育成に向けた授業づくりの現状をつかみ、今後の展望を見つめるために、それぞれのお立場から語っていただくことをねらい、企画しました。

学習指導要領で育成を目指す資質・能力が明確化され、学校では、その実現を目指した教育活動が行われていると思います。成果として、どのようなことをお感じでしょうか。

**奥田** 最初は「資質・能力とは何だろう？」という感じでしたが、最近は、授業研究会の場だけでなく、職員室でも「資質・能力」「見方・考え方」というフレーズをよく聞くようになりました。

また、学習指導要領の改訂と、GIG Aスクール構想による一人一台端末の導入時期がほぼ重なっていたこともあり、誰もが授業づくりを見直すきっかけになったと思います。先生方は、子供たちに対話をさせたり、思いを表現させたりしようと工夫しており「授業を変えよう」という意識をもっている先生方が多いと感じています。

**熊谷** 先生方の意識が変わってきたことで、子供たちにも変化はありましたか。

**奥田** 自信をもって自分の思いを表現しようという姿が見られるようになりました。まだ苦手意識をもっている子供もいますが、間違いを恐れずに発言しようとしたり、目的を意識して話し合ったりす

出席者



**清田美紀**

前・広島県東広島市教育委員会事務局  
学校教育部指導課 指導主事  
環太平洋大学准教授



**赤川太**

前・秋田県東成瀬村立東成瀬小学校長  
秋田県羽後町立西馬音内小学校長



**奥田正幸**

千葉市立本町小学校教諭

る姿が多く見られるようになりました。

**清田** 奥田先生がおっしゃったように、資質・能力の育成という意識は高まってきたように感じます。校内研修や域内の研究会でも、資質・能力の育成をテーマに掲げたものが増え、三つの柱をバランスよく身に付けるための授業はどうあるべきかを考える雰囲気になってきていると思います。

**赤川** 秋田県では、「言語活動の充実」が示された前回の学習指導要領改訂の頃には、ほぼ探究型の授業に取り組んでいたと思います。

ただ、「主体的・対話的で深い学び」については、どの先生も対話をさせるけれども、本当に授業のねらいを達成させるための対話なのかどうかという点については、課題だと思っています。

私の学校では、思い付いたことをキーワードで書かせた上で対話に入っていく授業を行っています。が、「深い学び」に導く対話については、教師によって差があると感じています。

**熊谷** 成果が感じられる一方で、課題もあるとのことですが、課題としては、どのようなことをお感じでしょうか。

**清田** 先ほど、成果として資質・能力をバランスよく身に付けていこうという意識は高まっていると話しましたが、一方で、果たして本当に子供の力として育っているのかということは心配です。

特に「学びに向かう力、人間性等」について、粘り強さとか、自分なりに調整していく部分は、子供たち自身が学びの成果として感じられているのか、と思っています。

**奥田** 私も「学びに向かう力、人間性等」の育成に難しさを感じています。一生懸命に前向きに取り組む子供もいる一方で、「苦手だからこれはやらない」「やりたくない」というような、粘り強さは対極にあるような子供もいます。その子供たちはどういう手立てを講じていく必要があるか、苦労している先生が多いと感じています。

**赤川** 三つの柱は学校教育法の第三十条第二項と重なっています。主体的に学習に取り組ませるためには、振り返りの視点を明確にして、自身の学習を振り返らせることがとても大事ではないかと思っています。

私の学校では、子供が「今日は楽しか

司会者



熊谷有紀子

文部科学省教科調査官

った」ではなく、その時間に自分はどうなことを習得して、どのように変わったのかを書かれています。そうすることで教師も、目的を明確にした授業をするようになります。

**清田** 私は、市の指導主事として学校を訪問させていただいています。振り返りという点では、子供たちに「めあて」をもたせるような板書がされ、今日どんな学びの過程があったのかを振り返らせていると感じています。若い先生もベテランの先生も共通して「振り返りを大事にしていこう」とされているように思います。

しかし、どうしても授業時間が押しすぎてしまい、十分な振り返りができないこと

学校教育目標の実現に向けた総合的な学習の時間の充実

# 各学校において定める総合的な学習の時間の目標と内容の関係について

齋藤博伸

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官  
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

## 1 各学校において定める総合的な学習の時間の目標

今次改訂された小学校学習指導要領では、各学校において定める総合的な学習の時間の目標については、各学校の教育目標を踏まえ、総合的な学習の時間を通して育成を目指す資質・能力を示すこととされている。『小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 総則編』では、総合的な学習の時間の目標と学校教育目標との関係を次のように述べている。

第5章（略）第2の1に基づき各学校が定めることとされている総合的な学習の時間の目標については、上記により定

められる学校の教育目標との関連を図り、児童や学校、地域の実態に応じてふさわしい探究課題を設定することができるといふ総合的な学習の時間の特質が、各学校の教育目標の実現に生かされるようにしていくことが重要である。

このことから、総合的な学習の時間の目標は、学校教育目標と直接的につながるといふ、他教科等にはない独自の特質を有している。そのため、学校教育目標を教育課程で実現していくに当たって、総合的な学習の時間の目標が学校教育目標を具体化していく。そして、教育課程の中核として位置付け、他教科等の学習を関連付けたり、教科等の枠を超えた全

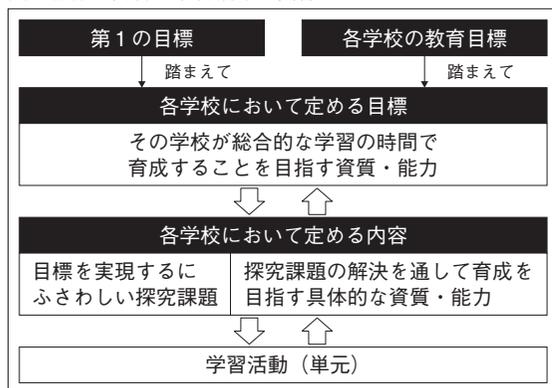
ての学習の基盤となる資質・能力が育まれ、活用されることにより学校教育目標のよりよい実現を目指していくことになる。

## 2 目標と内容と学習活動の関係

学校教育目標のよりよい実現を目指す総合的な学習の時間においては、横断的・総合的な学習や探究的な学習としての学習活動（単元）とすることが欠かせない。そのためには、次頁の図のように全体計画に「各学校において定める目標」「目標を実現するにふさわしい探究課題」「探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力」を示し、全教職員

【解説】各学校において定める総合的な学習の時間の目標と内容の関係について

図 目標と内容と学習活動の関係



で共通理解を図る。  
 このような関係を踏まえて設定した「探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力」は、各学校において定める目標に記された資質・能力を各探究課題に即して具体化したものであり、学習活動(単元)を通して、どんな子供を育てたいかを明示することになる。したがって、「探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力」には、学校教育目標が実現された際に現れる望ましい子供の成長の姿が示されることになる。この「目標を実現するにふさわしい探

究課題」及び「探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力」の二つをよりどころとして、学習活動(単元)を計画、実施、評価、改善していくカリキュラム・マネジメントが求められる。

3 カリキュラム・マネジメント

横断的・総合的な学習や探究的な学習の広がりや深まりを促すためには、校長を中心としつつ、教科や学年を超えて、学校全体で取り組んでいく必要がある。ここでは、管理職のみならず全ての教職員がカリキュラム・マネジメントの必要性を理解し、日々の授業についても、教育課程全体の中での位置付けを意識していく。また、総合的な学習の時間の充実には、校外の様々な人や施設、団体等からの支援や保護者の理解と協力も必要となる。そのためには、総合的な学習の時間で探究的に学ぶ子供の姿を授業公開やウェブページ、学校通信等で紹介したり、保護者や地域住民・団体等に直接説明したりすることも考えられる。

このとき、学校教育目標を踏まえながら、子供がどのように成長しているのか、資質・能力が確かに育成されているかなどを捉え、学習活動(単元)を計

画、実施、評価、改善していくこのことは「社会に開かれた教育課程」の実現を通じて子供に必要な資質・能力を育成するカリキュラム・デザインにもつながる。

4 教職員の研修

総合的な学習の時間を充実させ、その目標を達成する鍵を握るのは、指導する教師の指導計画の作成と運用の能力、そして、授業での指導力や評価力などである。各学校の校内研修においては、校長のリーダーシップの下、学習指導の改善のみならず、教育課程全体を俯瞰して捉え、教育課程の改善を図ることをねらいとした総合的な学習の時間の研修を積極的に取り入れることが必要である。

また、学校教育目標の実現や目指す資質・能力の育成について教科等横断的な視点からのカリキュラム・デザインできるミドルリーダー的な教職員が育つことが求められている。このことから教育委員会等は、所管の教職員の研修効果が一層上がるよう、十分な情報提供をしたり研修会を開催したりすることが望まれる。

(さいとう・ひろのぶ)



思います。特に、思考力、判断力、表現力等といった資質・能力を育成する場面においては、クラウドが大きな力を発揮すると思います。これまでの授業は、黒板や教科書、ノートなどを活用しながら一斉に教えるという、一〇〇年以上にわたって改善改良が加えられてきた、ある意味完成された形です。この授業の進め方は、いわゆる一斉授業と言われるものです。先生の発問や指示に合わせて子供たちが一斉にインプットをして、先生の指示で話し合いや発表をします。先生の指示のもとで協働学習をしたり、全体発表をしたりする授業に、そのまま一人一台端末を導入してもクラウドのよさを感じられず、「紙や鉛筆のみの授業の方がよかったのではないか」という意見が出ることも少なくありません。

しかし、子供たち一人一人が別々の興味・関心をもっていることを踏まえれば、これからは、クラウドや一人一台端末を活用した新しい授業を考えていく必要があります。それぞれ学びたいことやべ

ー入も異なりますから、なるべく一人一人のペースに寄り添っていく必要があるのです。つまり、学びのスタイルが複線型になっていきます。この複線型の授業は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実のイメージに近いと私は考えています。

一斉授業のイメージのまま複線型の授業を考えてしまうと、三五人の子供がいれば、三五通りの指示や説明をしないといけないと思ってしまうがちです。それは極めて難しいことです。子供一人一人が目標をもち、自ら学んでいくというようなイメージをもつことが非常に重要です。

また、複線型の授業ではクラウド環境と一人一台端末が大きな力を発揮します。複線型の授業でも一斉指導でインプットをする場面はありますが、これまでと比べて、その時間が非常に短くなっていくと思います。

中には一人だけで学習を進めることがなかなか難しい子供もいますので、そのようなときに、クラウド活用による共有が役立つま

す。クラウド上で共有されているデータから、友達の進捗を参考にしたり、友達へ直接聞きに行ったりして、自分なりの考えをまとめていきます。これまでも、図画工作科の作品づくりなどで、アイデアに行き詰まった子供が友達の作品を一通り見て、新しいアイデアが浮かんでくることがありました。同様のことがクラウド上において全教科等で起こっていると考えるとイメージしやすいと思います。

### 3 おわりに

一人一台端末を活用することによって、個別最適な学びが充実します。そして、先生はクラウドを介して子供の進捗状況を端末上でリアルタイムに把握したり、実際の子供の様子を見たりしながら必要な支援をしていきます。これまでの一斉授業では、なかなか実現が難しかった複線型の授業を、クラウドや一人一台端末を活用することで容易に実践できるようになっています。そして、他者の考え

図2 StuDX Style 事例「1人1シートを相互参照」



方を参照して学ぶことや共同編集機能を活用して協働することなど、「新しい授業の形」が続々と生み出されています。(たかはし・じゅん)

※これまで二号にわたり堀田教授、高橋教授のインタビューを掲載してきた。次号からは、そこで紹介された、授業におけるクラウドの活用について、特設ホームページ「StuDX Style」掲載事例と関連付け、紹介する。(文部科学省初等中等教育局 GIGA StuDX推進チーム)

# 幼児教育

## 事例

### ■特集…自ら環境に関わり、遊びをつくり出す 身近な環境を生かして 遊びをつくり出す幼児の 姿から学ぶ環境の構成

■特集…自ら環境に関わり、遊びをつくり出す

宇多津町は、香川県のほぼ中央にあり、瀬戸大橋の四国の玄関口でもある。

創立一七七年目を迎えた本園は、周囲を山や川、田園に囲まれ、自然の移り変わりを感じながら四季折々に豊かな体験活動ができる環境にある。

宇多津幼稚園は、町で唯一の公立幼稚園である。少人数の組織のため、園内では、教師の発想が固定化しないよう、幼稚園教育要領に示される「環境を通して行う教育」を基本として、①教職員の意識を変える、②今ある環境を見直す、③記録を生かし語り合うことを保育の土台として大切にしている。

本稿では、五歳児の幼児が自ら環境に関わり、どのように自分たちで遊びをつくり出しているのか、また、それを支える環境の構成について考察したい。

#### 1 事例「みんなで流しそうめんしよこ」 五歳児六月

##### ○教師の意図と環境の構成

・保育室には、幼児たちが遊びの中で自由に選んで使えるように材料コーナーを設けている。家庭にも協力を得て、家庭から持参した廃材なども置いており、多種多様な材料を集めている。  
・段ボールを自分で扱えるように、段ボ

ールカッターも用意した。

#### (1) 「なかなか切れない」

A児は、廃材を利用してつくって遊ぶことが好きで、形が面白い物や珍しい廃材を見付けると、イメージを広げながら意欲的につくり始める。ある日、A児は、保育室の材料コーナーから長くて硬い紙製の筒を持って来て「流しそうめんしよう」とダンボールカッターで筒を縦に半分に切り始めた。

以前、祖父母の家で流しそうめんをした経験をうれしそうに友達や教師に話したことがあり、そうめんを流した竹に似ている形状の筒を材料コーナーで見付



香川県宇多津町立宇多津幼稚園教諭  
木谷一恵

け、遊びに使おうと思ったようだ。A児が「なかなか切れないなあ。誰か手伝って」と言うと、「いいよ」とB児とC児がやって来た。A児が「交代で切ろう」と誘い、「硬くて切りにくい」「ちゃんと押さえて」など、言葉を交わしながら楽しそうに交代で切り進めた。教師は、三人が自分たちで進めていると思い、安全に配慮しながらしばらく様子を見ていた。

半分ほど切ったところで「先生も手伝って」と言う。教師は、一メートル近くある筒を幼児たちで切るには少し大変だろうと思う、「これを切って何に使うの？」と尋ねると「みんなで流しそうめんするよ」と話す。教師は、幼児たちの発想の面白さに驚くとともに、幼児たちの「筒を切りたい」という思いを実現できるように手伝うことにした。

そして、ようやく筒を二つに切り終え、三人は「やったあ」と喜び、教師も「よかったね」と一緒に喜んだ。

(2) 「**桶を使えばいいんじゃない?**」  
三人は、半円形になった紙製の筒（以下「紙製の桶」とする）を廊下から裏庭に向け、布ガムテープで二つの紙製の桶をつなげて貼った。早速、B児が水を汲

んできて水を流し始めた。

水の流れを見て、最初は「下まで行った」と喜んでいたが、水を流して遊んでいるうちに紙製の桶の表面に水が浸み込んで柔らかくなり始めた。A児はそのことに気付き、「あー壊れてきた」と慌てて布ガムテープで補修し続けたが、水に濡れているためうまく貼れない。A児は「もう」。なんでこんなになるの。貼れない」と怒る。しばらく、つなぎ目を三人で押さえたり貼ったりすることを繰り返す。

ふとB児が「大砂場のアレ（プラスチック製の桶のこと）使えばいいんじゃない?」と、砂場で使用している桶を二枚運んできた。A児も「ほんまや。ナイスや」と言う。C児が「これは水に強いしね」と言い、紙製の桶をプラスチック製の桶に替えた。

片付けの時間になると、A児は、「また、明日使おう。乾かしておこう」と言って、濡れた紙製の桶を、B児、C児と一緒に保育室前の日当たりのいい場所に大切に置いた。

#### 〈考察〉

・A児は、材料コーナーにあった筒状の芯を見付け、経験したことのある「流

しそうめん」のコースを想起したのではないかと思われる。園の材料コーナーが五歳児の幼児たちにとって、「遊びたい」という心が動かされるような魅力ある環境となっていることが大切である。

・幼児たちは、三歳児・四歳児の頃に、ドングリコースやお祭りの太鼓台の担ぎ棒として紙製の筒を活用した経験があった。教師は、幼児たちが、紙製でも頑丈であることを体験を通して理解していると捉えた。だからこそ、A児は、硬くてコーティングされた筒の質感や筒状の形から、流しそうめんのコースに使えるのではと考えたのだろう。教師が紙製の桶でよいのか問い掛けてもよかったかもしれないが、「なんでこんなになるの」という言葉からは、予想と異なり、実際に水を流し、次第に柔らかくなっていく紙製の桶や、布ガムテープが貼っては剥がれるさまを見て、実感をもって紙の性質を理解したと思われる。

#### (3) 「**こんなに長くなつた**」

翌日、園庭に干しておいた紙製の桶の様子を見て、A児とC児は、「上の方は乾いているけど、まだ下が濡れてるね」